

12	知教連 (美浜町)	○ 河 和 中 ^{バン} 伴 ^{コウイチ} 浩一 野 間 中 坂本 晃祐 河 和 中 小原 洸太 奥 田 小 石川倫太郎 河 和 小 内野 陽介 野 間 小 小栗 那月 布 土 小 藤井 智也 河 和 小 間瀬 晋作 上野間小 加藤 朱里
----	--------------	---

分科会番号	13	分科会名	能力・発達・学習と評価
-------	----	------	-------------

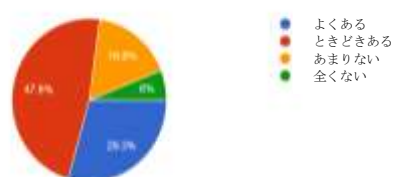
個性が生きる学びのデザイン ～「自己選択」と「振り返り」を核とした授業づくり～

1 テーマ設定の理由

昨今の教育現場では「令和の日本型教育」という考えの基、児童生徒一人一人の特性や個性を大切にし、主体的に学ぶ教育が求められている。これまで美浜町でも「主体的に学ぶ」という言葉をキーワードに児童生徒が主体的に学びに取り組むためのさまざまな工夫を授業実践の中に取り入れながら研究を行ってきた。教科や単元にとらわれず、また児童生徒が自分の得意・不得意に関わらず、どんな活動にも主体的に学びに取り組むことはこれからの教育活動においても非常に重要なことであると考え。主体的な学びを実現するためには、自ら学習方法を選択し、その効果を振り返りながら改善していくことが大切であると考え、本テーマを設定した。

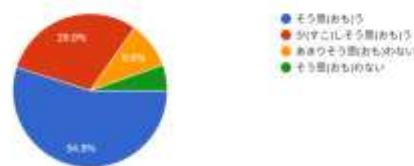
研究を進めるにあたり、町内の児童生徒にアンケートを行った。

勉強(べんきょう)のやり方(かた)を自分(じぶん)で考(かん)がえることがある



【図1 学習方法を考えたことのある】

自分(じぶん)に合(あ)う勉強(べんきょう)の方法(ほうほう)を見(み)つけてみたい

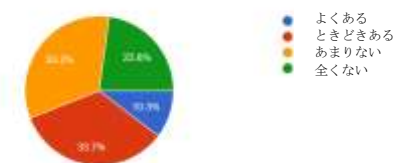


【図2 自分に合う学習方法を見つけたい】

事前アンケートの結果から、多くの児童生徒はこれまでに自分に合った学習方法について考えた経験を有していることが分かった【図1】。また「自分に合う学習方法を見つけてみたい」と回答した児童生徒は8割を超えており、自らの学び方への関心や改善意欲の高さがうかがえた【図2】。一方で、学習後に自らの学びを振り返った経験がある児童生徒は少なく、自分に合った学習方法を検証したり改善したりする機会は十分ではないことが明らかとなった【図3】。

このことから、児童生徒は学び方への関心や意欲を有しているものの、それをよりよい学びへとつなげるための振り返りの過程が十分に機能していないことが考えられる。そこで本研究では「振り返り」を学習活動の中核に位置付け、自らの学習方法の効果を見つめ直し、次の学習方法の選択や改善につなげることができる授業実践を行うこととした。

授業(じゅぎょう)のあとに、「今日(きょう)のやり(かた)はどうだったか」を考(かん)がえることがある



【図3 学習方法を振り返ったことがある】

2 研究の構想

(1) 目指す児童生徒像

- ・ 自分に適した学び方を選択し、その学び方を振り返って次の学習に生かす児童生徒

本研究では自分に適した学び方を選択し、その学び方を振り返って次の学習に生かす児童生徒の姿として次の2点を考えた。

- ・これまでの振り返りを基に自分の能力や考えに合った学び方を選択することができる。
- ・本時の学びを振り返ったり、これまでの学びの中で考えたことを参考にしたりしながら次の学習に生かすことができる。

(2) 研究の仮説

- 仮説 1 学習過程で自己選択の場面を設けることで、自分に適した学び方を選択することができるだろう。
- 仮説 2 本時の学び方の適否について振り返る場面を設定することで、自分に合った学び方を見だし、次の学習に生かすことができるだろう。

(3) 研究の方法

- A (手立て 1 に対して)
- ・児童生徒が自分に適した学び方を選択できるよう学習過程に自己選択の場面を設ける。
- B (手立て 2 に対して)
- ・自分に適した学び方を見いだすために、学び方の適否について着目した振り返りの場面を設ける。

3 研究の内容と実践

(1) 小学 6 年生 算数 「文字と式」

① 研究の方法

A 自分に合った学び方を選択する工夫

- ・練習問題や自作問題作成、ノートまとめを行う際に、自分に合う学習方法を選択させ、学習に取り組ませた。

B 自己の学び方を客観的に見つめ、次時の学習に生かす工夫

- ・単元を通して同じ振り返りシート（学びの足跡）を用いることで、継続的に学習方法について振り返る機会を設けた。

② 授業の様子

毎時間 20 分程、個々の課題に取り組む時間を設けた。その際に自分に合う学習方法を選択させ取り組ませた。初めに、一人で黙々と課題に取り組むか、友達との学び合いをするのかについて選択させた。学習に使う問題については、教科書の基本的な問題に取り組むのか、A I ドリルを用いて自分に合った問題に取り組むのか、プリント学習を行いテスト形式で、自分の実力を確かめたり、発展的な学習をしたりするのかを選択させた。また、問題を解くという形式ではなく「自作問題を作る」や「わかりやすくノートにまとめる」なども選択肢に入れた。最後に学びの足跡【図 4】に取り組み、自分の学習方法を客観視させ、次時の学習方法への作戦を立てる時間を設けた。学びの足跡の「次の作戦」の記述から、どの児童も本時の学習をどのように取り組むのかを考え、意欲的に学習に取り組む姿が見られた。中には、自作の問題を友達と互いに解き合っている様子が見られたり、I C T 機器を活用して学級全体で問題を共有したりする姿も見られた。また、反復して問題に取り組む児童は、教科書や用意されたプリントだけではなく、A I ドリルも活用して、自身の力量に合わせた学習に取り組んでいた【図 5 図 6 図 7】。

【図 4 学びの足跡】



【図 5 取り組みの様子】



【図 6 取り組みの様子】



【図 7 取り組みの様子】

単元の途中で確認テストを行うことで、今までの学習方法について振り返り、これからどのように学んでいくのかを考えさせた。自分が選択した学習方法によって理解が深まったかを確認テストで確かめ、その結果を今後の学習方法を考える材料とした。

③ 考察

学びの足跡を活用することで、自己の学び方を客観的に捉えることができていた。また、多岐にわたる選択肢を用意したことで、自分に合ったさまざまな学び方を選択することが可能になった。これまでは、一人で学習することが好きだった児童が、友達と学び合うことでより理解が深まる様子が見られた【図8】。さらに、学習前と比較して学習後には、児童の学習に取り組む意欲の向上が認められ、主体的な学習につながった。これは、自ら学習方法を決定できたことにより自己決定感が高まり、学習への主体性が促されたためであると考えられる。その一方で、自己選択がうまくいかずに毎時間同じ学習方法を用いて課題に取り組んでいる児童もいた。また、友達に誘われたことで、断れずに「本当は一人で学習したかったが、友達と一緒に学習した。」と記述している児童もあり、自己選択の在り方について課題が見られた。これらのことから、児童が互いの学び方を認め合い、理解することが必要であると感じた。そのためには、授業改善だけでなく、学級経営の面から、互いの考えを尊重し合える関係作りが必要になると感じた。

【図8 友達と学び合うことで、自己の学びに生かすことができた児童の記述】

(2) 小学2年生 体育 「機械・器具を使つての運動遊び（マットを使った運動遊び）」

① 研究の方法

A 自分に合った学び方を選択する工夫

- ・単元を通して「見るの術」「友達に見てもらうの術」「コツカードの術」「やさしい場の術」の4つの学び方を提示し、自分の課題に応じて学び方を選択できるようにした。
- ・技の難易度に応じて「やさしい場」を設定し、自分の実態に合った場を選択して練習できるようにした。

B 自己の学び方を客観的に見つめ、次時の学習や生活に生かす工夫

- ・第2時から第5時まで同じ振り返りシート（学びの足跡）を活用し、毎時間自分が選択した学び方とその理由、学び方が自分に合っていたかを振り返る時間を設けた。
- ・振り返りでは、「次はどの作戦で取り組むか」という次時の作戦を考えさせることで、本時の学びを次の学習へ生かせるようにした。

② 授業の様子

第1時では、忍者になりきってさまざまな技に挑戦し、それぞれの技を体験した。第2時から、自分の課題に応じて「見るの術」「友達に見てもらうの術」「コツカードの術」「やさしい場の術」の中から学び方を選択し、練習に取り組んだ。また、前転やかえる逆立ちなどの技では、児童の技能に応じて「やさしい場」を設定した。例えば前転では、坂マットを用いたコース、かえる逆立ちでは壁の近くにマットを置き練習するコース等、児童が自分の実態に応じて練習場所を選択できるようにした。単元前半では「見るの術」を選択する児童が多く見られたが、学び方を十分な理由をもって選択できていない様子も見られた。また「友達に見てもらうの術」を選択した児童の中には、一人で練習を進め、十分に助言を受けられていない姿も見られた。そこで第4時以降は、学び方を選択する前に「今日は何ができるようになりたいか」「そのためにどの学び方が合うか」考えさせる時間を多く設けた。また「なぜそれを選んだのか」を児童自身に言葉で説明させることで、目的をもって学び方を選択できるようにした。その結果「前回りができるようになりたいからやさしい場で練習する」「できるか確認したい

から友達に見てもらおう」など自分の課題を意識しながら学び方や練習の場を選択する児童の姿が見られるようになった。授業の終わりには、「学びの足跡」に取り組み、自分が選択した学び方が合っていたかを振り返るとともに、次時の学び方について考える時間を設けた【図9 図10 図11】。



【図9 取り組みの様子】



【図10 取り組みの様子】



【図11 取り組みの様子】

③ 考察

学びの足跡の記述欄には「できているか分かるから、見てもらうにする」のような記述が多くあり、児童は徐々に自分の課題を意識し、自分なりの理由をもって学び方や練習の場を選択する姿が見られるようになった。一方で、単元前半では選んだ理由まで書けず、何となく選んだり、友達に見てもらおうの術を選択しても一人で練習したりする姿も見られた。また、学び方を選んだ理由を考える時間を多く確保したことで、体育で最も大切な運動をする時間が短くなるという課題も見られた。これは2年生の児童にとって、自分の課題を把握し、それに適した学び方を自ら判断して選択することは容易ではないことを示している。このことから、低学年においては、選択させる前段階として、それぞれの学び方の特徴や有効性を理解できるように指導し、そのよさを繰り返し価値付けていくことが重要であると考えた。

(3) 中学3年生 理科の実践 「ひ孫の代では、丸：しわ=?：?（メンデルの実験）」

① 研究の方法

A 自分に合った学び方を選択する工夫

- ・課題に対する探究方法を実験・理論の2パターンから選び、自分に合った学び方を選択する。

B 自己の学び方を客観的に見つめ、次時の学習に生かす工夫

- ・次時に探究課題（類題）を学習することで、自分の反省を生かした学び方ができるようにする。

② 授業の様子

次のような流れで「遺伝子の伝わり方」について、実験を通して現象を捉える方法と、教科書に掲載されている理論を基に規則性を考察する方法の2つを用いて学習を行った【図12】。

第2時では、子から孫への遺伝子の伝わり方について、紙袋から遺伝子に見立てた2色のカードをランダムに取り出すことで「分離の法則」を再現する実験を行い、現象を捉えるとともに、教科書の理論を基に考察することで、実験と理論両面から学習を行った。そして孫の代に現れる形質の割合を求めた。

授業のまとめの時間に「次時も類似した課題で探究活動を行う」ことを伝え、生徒は次時に用いる探究方法を各自で選択した。第3時では、孫からひ孫への遺伝子の伝わり方について、生徒が各自で選択した方法で探究活動を行った。

学習方法を自己選択させたことで、生徒が主体的に学習に取り組む様子が見られた【図13 図14】。また、積極的に探究活動に取り組んだ結果、その後の話し合い活動においては、自らの探究内容を進んで説明をしたり聞いたりする姿が見られた【図15】。また、振り返りの場面では、自身が選択した方法の適切さや改善点、本時の学習の達成度について、多面的に検討する様子が確認された。

第1時	親から子への遺伝の規則性について (実験・理論の両方)
第2時	子から孫への遺伝の規則性について (実験・理論の両方)
第3時	孫からひ孫への遺伝の規則性について

【図12 遺伝子の伝わり方】



【図 13 実験を行う様子】 【図 14 理論で考える様子】 【図 15 話し合い活動】

③ 考察

学びの足跡の記述欄では、【図 16】のような記述が多数あり、多くの生徒が学び方を自己選択することの有用性を実感していることがうかがえる。また「よくできた」「できた」を選択した生徒が多数を占めていた（96 人中 72 人）ことから、学習方法の自己選択が生徒の主体的に学習に取り組む態度の形成につながったと考えられる。

一方で、すべての生徒にとって自己選択が有効に機能したとは限らず、学習方法の選択に迷う様子や、自身に適した方法を十分に選択できていない様子も一部に見られた。これらのことから、学習方法の自己選択をより効果的に機能させるためには、選択肢の提示の工夫や、選択の根拠を明確にさせる支援など、教師による適切な働きかけが重要であると考えられる。

③自己評価	・自分で選んだ方法はどうか？ ・いつもと比べてどうか？	など
☒ よくできた ☐ できた ☐ あまりできなかった ☐ できなかった	選んだ理由 今までの実験よりも理論で答えを導き出したことによって理解が今までより深まりやすくて身についたと感じた。そして理論で答えを導き出すときに、しっかりまずは自分で考えてそれがなぜ違うのかを知ることによって理解が深まったと感じた。	
☒ よくできた ☐ できた ☐ あまりできなかった ☐ できなかった	選んだ理由 やっぱり自分は理論で考えたほうが楽しい。全員に説明がうまく行き渡っていないかも知れど、自分の調べた結果を伝えることができたから。	

【図 16 有効性を示した記述】

4 研究の成果と課題および今後の展望

(1) 研究の成果

A 自己選択について

学習過程に自己選択の場面を設けたことで、児童生徒は自分の実態や課題に応じて学習方法を選択しようとする姿が見られるようになった。課題や学習形態、練習方法などを自ら選択することで、「自分で学ぶ」という意識が高まり、主体的・意欲的に学習へ取り組む姿勢につながった。また、一人で学ぶか友達と学ぶかを選択したり、ICT機器やAIドリル、自作問題づくりなど多様な学習方法を目的に応じて選択したりする姿も見られた。さらに、学び方を選択する経験を繰り返すことで「自分にはどの学習方法が合っているのか」を意識する児童生徒が増え、自分に適した学び方を考えながら学習に取り組む姿が見られるようになった。

一方で、学習方法を十分な根拠をもって選択できなかったり、毎時間同じ方法を繰り返して選択したりする児童生徒も見られた。こうした児童生徒に対して、教師が学習の状況やこれまでの学習方法を振り返るよう促すなど、適切な支援や働きかけを行うことで、自分の学習状況に応じて、より適した学習方法を選択できるようになる可能性が示唆された。

B 振り返りについて

学び方に着目した振り返りを継続的に行うことで、自分に適した学習方法を見つけようとする姿勢が育まれた。学びの足跡には、学習方法について根拠をもって評価する記述が増え、「友達と学んだ方が理解しやすかった」「一人で取り組んだ方が集中できた」「次回は違う方法を試したい」といったように、自分の学習を客観的に捉え、学習方法の効果を具体的に振り返る様子が多く見られた。このような記述の増加から、自分にとって効果的な学習方法を意識しながら学ぶ姿勢が徐々に身に付いてきたことがうかがえる。また、振り返りを積み重ねることで、自分に合った学び方を判断する力が徐々に育ち、状況や学習内容に応じて学習方法を選択しようとする姿も見られるようになった。さらに、前時の振り返りを次時の学習に生かし、「次は友達と話し合って考えたい」「一人で整理してから交流したい」など、自ら学習方法を改善しようとする様子も確認できた。

C アンケートの変容について

事前アンケートと同じアンケートを各実践の最後に行うことで、児童生徒の変容を確認した。



【図 17 事後アンケート】

事後アンケートの結果から、「勉強のやり方を自分で考えることがある」児童生徒の割合が事前アンケートに比べ向上していることが分かる。これは、自己選択を軸に授業実践を行ったことが要因の一つであると考えられる。また、「授業の後に今日のやり方はどうだったかを考えることがある」児童生徒の割合も事前アンケートに比べ向上しており、学びの足跡を活用し、継続的な振り返りを行ったことで、自己の学び方を客観視することができたことが要因の一つであると考えられる【図 17】。

(2) 課題

A 自己選択について

自分に適した学び方を選択することには個人差が見られた。難しすぎる課題や簡単すぎる課題選択したり、自分の得意な活動だけを繰り返したりする児童も見られ、必ずしも適切な自己選択ができるとは限らなかった。そのため、児童生徒が自分の実態を踏まえて選択できるよう、教師による助言や選択肢の工夫、段階的な課題設定などの支援が必要であると考えられる。また、児童生徒が自分に合った学習方法を、より客観的に評価できるようにする必要がある。例えば、単元の途中で確認テストを行い、現在の自分が単元の内容をどの程度理解できているのかを把握する機会を設けることで、自身の学習方法の適切さを振り返り、次時からの学び方を考えることにつながると考える。

さらに、友達から誘われたことをきっかけに、自分で考えて選択した学習方法ではなく、友達と同じ学習方法を選択して学習に取り組む児童生徒も見られた。このことから、児童生徒が周囲の友達の影響を受けながらも、自分に合った学習方法を安心して選択できるよう、日頃から互いの考えや選択を認め合う関係づくりを進めていく必要がある。

B 振り返りについて

振り返りについても質について、学習内容の感想に終始する児童生徒がいる一方で、自分に合った学び方やその理由、次時への改善点まで記述できる児童生徒もいた。振り返りが自己調整につながるものとなるよう「どの学び方がよかったのか」「なぜそう考えたのか」「次はどのように学ぶか」といった視点を明確に示し、継続的に指導していく必要がある。さらに、友達と話し合う学び方を選択した児童生徒の中には、話し合うこと自体や動画を撮影することが目的となり、学び合いが十分に深まらない場面も見られた。協働的な学びの質を高めるためには、助言の仕方や対話のポイントを具体的に示すとともに、教師が適切に価値付けを行いながら、自律的に学び合える学習環境を整えていくことが今後の課題である。

(3) 今後の展望

自分に合った方法を選ぶことや自分の現状を知ったり、今回の学びや活動を振り返ったりする、そしてそれを生かして、次をよりよくするという活動は主体的に学ぶという点で大切だと考える。しかし、主体的に活動するだけでは、必ずしも児童生徒の成長につながるとは限らない。本研究では、学び方について考える姿は児童の行動や振り返りから確認することができ、主体性の向上は確認できた。一方で「自分に適した学び方を見いだす」という研究のねらいについては、その達成度を評価する具体的な指標を設定できていなかった。そのため、児童生徒が学び方を選択できるようになったことと、自分に適した学び方を獲得できたことを明確に区別して検証することが難しかった。今後は、学び方の選択理由や選択の変容、学習成果との関連を継続的に分析できる評価指標を作成するとともに、自己選択と振り返りを往還しながら自分に適した学び方を見いだしていく授業づくりをさらに追究していきたい。